青嶺 seirei

文責 田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

素晴らしい先輩 柳本選手に感謝！

先週の金曜日、本校出身のオリンピック競泳選手、柳本幸之介さんが応援のお礼を兼ねて来校され、後輩たちと「語る会」に参加されました。

東京・パリと二大会連続でリレーの選手として活躍した先輩を前に、やや緊張した面持ちの生徒たちでしたが、時間が経つにつれ雰囲気も和らぎ、素晴らしい先輩から多くの話を聞くことができました。

もっとも印象に残っているのは「試合では緊張しません。なぜなら納得のいく練習を積み重ねているからです」という言葉です。またリレーでは最後までやり切ればそれでいい、だけでなく、「何が何でも」決勝に残ることを目標にしていたそうです。揺るがぬ意志の強さ、そしてそういうメンバーの力が結集しての結果だったのです。

夢や目標を高く掲げ、それを実現していく姿は後輩たちの目標となるでしょう。

穏やかで、あくまで自然体の柳本さんでした。どうかケガには十分に気を付けて、少しだけ体を休め、また次の目標に向かって力強く進んでほしいと心から願っています。そしてまた青嶺中学校に来て、後輩たちに思いを伝えてください。その日が来るのを心待ちにしています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

チェ・チヨンのこと

ワーキングホリデーという制度は働きながら学ぶ、旅を楽しむという様々な特権があるビザです。大学三年から四年に上がる一年間を休学し、その制度を使ってオーストラリアに渡りました。

そのビザでは十週間の語学学校での勉強が認められていたので、シドニー郊外のストラスフィールドにあるＡＣＬという学校に通いました。自校の校舎があり、グラウンドがあり、語学学校としてはとても充実した環境だったからです。最初の四週間は学校の先生をリタイアした方のお宅にホームステイし、オーストラリアの家庭の雰囲気を存分に味わいました。学校のクラスメートの国籍は様々で、５段階中レベル３の私のクラスは、韓国、台湾、タイ、インドネシア、イタリア、スイス、そして日本で、全く違う文化、宗教、性別、年齢、経済状況、立場が混在したにぎやかで、とても仲が良いクラスでした。それでも、男女平等や戦争などがテーマの時は互いに譲らず、激論になることもしばしばでした。

四週間がたち、新しいことに挑戦しようとクラスメートだった、韓国から来たチェ・チヨン君と部屋を借り、共同生活を行いました。当時私は二一歳、チヨンは一七歳でした。年も近かったのですが、ちょっとやんちゃで自由なチヨンとは気が合い、一緒に暮らすことになりました。

不動産屋巡りをしたり、家具を買いに行ったり、レンタル家電のお店で手続きしたり…その途中でシドニータワーに観光に行き家族へのお土産を買ったり、ジャジャ麺を食べたりしました。お土産がメイドインコリアだったといって落ち込んだり、このジャジャ麺は美味しくないから、泰司に本場の美味いジャジャ麺を食べさせたいと言ってくれたり、行動力とバイタリティーに溢れそして素直な彼と一緒に行動したのは本当に楽しかったです。

学校の近くのスリランカ人の大家さんの家の一角を借り、共同生活が始まりました。広い庭があって、古いものの素敵な物件です。ＡＣＬ仲間たちで集まって何度となく飲み会をしていろいろな話をしました。

現代っ子の彼はお隣のイタリア人の女の子に恋をし、どうしたら仲良くなれるか相談してきました。まずは彼女が飼っていた犬のベンと仲良くなる作戦を二人で練りました。様々な困難や差別を受けることもありましたが、いつでも元気で前向きなチヨンとなら乗り越えられたし、そんな彼が大好きでした。

ＡＣＬを卒業し、私はシドニーに次ぐ第二の都市パラマタの日本食レストランでアルバイトを始めました。同居人が増えて日本人・韓国人総勢４名の生活はとても楽しくにぎやかでした。チヨンはソウル出身の現代っ子だったので、言葉遣いや態度があまりにひどい時にはプサン出身の年上のジェイエルによく怒られていました。

韓国の儒教思想に則った礼儀作法を韓国からの留学生たちは私に教えてくれ、「彼のことをよろしく頼む」「君は年上だから責任をもって世話をしてあげてほしい」と繰り返し言われました。今とは比べようがないくらい情報が少ない中で、お互いを知るのは本当に手探りで、日本人を快く思わない人も多く、言い合いになったこともありました。

しかし、互いがどう思っているか、なぜそう思うのかを理解しようとし、そして歩み寄りたいという意志を持ち続けることで、韓国のコミュニティから徐々に受け入れられるようになり、そのうち家族のように大切にしてもらえるようになりました。韓国人街に材料を買いに行って手作りのキムチを漬けたり、病気で寝込んだ時には高価な朝鮮人参の薬を持ってきてくれたり…決して十分でない英語での会話を通してでしたが、当時の偏った教育を超えて、お互い一人の人間同士として分かり合えることを実感しました。皆さんにいつも言っている「対話」の力はここにあるのです。分かろうとする、分かってもらおうとする、違いを尊重する。たったこれだけで（このマインドをもち実行するだけで）居心地の良い安心感のある関係・場所をつくれるのです。

その後バイトで資金を貯めバイクを購入した私は北へ向けて旅立ち、チヨンはニューカッスル大学へと進学し、楽しかった共同生活は終わりました。三十年以上前のことですが今でもその瞬間瞬間を鮮やかに思い出します。近いうちにストラスフィールドを訪れ、思い出を辿りたいと思っています。